

墳丘外形規格からみた埼玉古墳群における 前方後円墳の築造動態

杉 崎 茂 樹

1 本稿の目的

古墳が政治性を持った築造物であると西嶋定生のように解釈するなら(西嶋 1961)、墳形の採用状況や規模の変化が、その被葬者や築造集団の政治動態を表すと考えることも、同時に同意されるだろう。墳形の格式については、前方後円墳を最上位として、→前方後方墳→円墳→方墳とランク付け、そしてその大きさを絡めて被葬者の力量関係を考える都出比呂志の主張(都出 1992)は古墳築造状況による集団の動態研究の基本的な考え方として定着している。

前方後円墳の被葬者同志の力量関係を比較する場合はその主軸長での比較が、円墳では直径で比較するといった簡単な比較で事足りる場合もあるだろうが、ある地域集団内での首長権の動態、あるいは地域集団間の関係を細やかに論ずるには、墳丘形態の平面・立面の両規格⁽¹⁾にまで踏み込んだレベルでの比較検討が必要であろう。

古墳時代後期の武蔵域随一の有力氏族集団の奥津城である行田市埼玉古墳群の場合、主軸長100m 超から50m 規模の前方後円墳が5世紀末から6世紀代に複数築かれていて、集団内での首長権の動向把握のためには、それらの前方後円墳の規模だけでなく、その規格と変遷の明確化も必要であろう。それらの前方後円墳の築造時期については、須恵器や埴輪から明確になりつつあるが、破壊を免れたものでさえ、築造から千年を遙かに超える時間の経過で立面形状は失われていて、土木構造物としての墳丘規格の三次元レベル(立面形状)での検討は、最新技術による側量図の作成と発掘調査を組み合わせるなどしないと困難に思える。現状での方法としては、近年までの発掘調査により墳丘規格の一要素である墳丘基底部外形(周濠の墳丘立上り部分)の平面形＝墳丘外形規格(以下「外形規格」と略)が復元または推定可能な状況になってきているので、その形態を比較することで関係性が追求できそうである。狭い視点での、ごく単純な検討の成果となるが、本稿ではその提示を目標としたい。

2 埼玉古墳群の前方後円墳の分布

研究者により「埼玉古墳群」の範囲は様々な捉え方がなされているので、どの範囲の古墳を埼玉古墳群と捉え、検討対象とするのかを明確にしておきたい。

「埼玉古墳群」と言った場合は埼玉地内に分布する稲荷山古墳や二子山古墳など、旧忍川の南に築かれた主軸長100m 超規模の大型前方後円墳8基が中核となった一群を指す研究者が多い。そして、旧忍川を挟んだ北側の長野地区に大型円墳の白山古墳を中心とした円墳ばかりが分布している。同じ埼玉地区の東方に前方後円墳の若王子古墳を核とする古墳分布があり、さらに、西側の佐間地区にも円墳ばかりの分布と南西の陣場地区にも前方後円墳の^{うし}大人塚古墳を含む分布が確認できる。結論から先に言うと、今述べた古墳は地理学的に同一のローム台地上に近接して築造されているので、本稿ではこれらをまとめて「埼玉古墳群」として取り扱い、そこに所在する前方後円墳合計10基を検討対象とする。

第1図はこれらの古墳分布と埼玉県作成の表層地質図とを重ねたもので、点線の範囲が周辺の沖積地との比高差1～2m 弱のローム低台地である。ほぼ中央の旧忍川南の中核的一群とその北の一群の間には現状では沖積化した部分があるが、実際はロームの基板土が存在しており、同一性を認めるべきで、「埼玉支群」と一括しておく。旧忍川は大型円墳の丸墓山古墳の周堀を壊していると見られ古墳群成立以降の開削の可能性が強く、旧忍川に沿った沖積地内でもローム層の基板土上に円墳が築造されているのが確認されているからである。

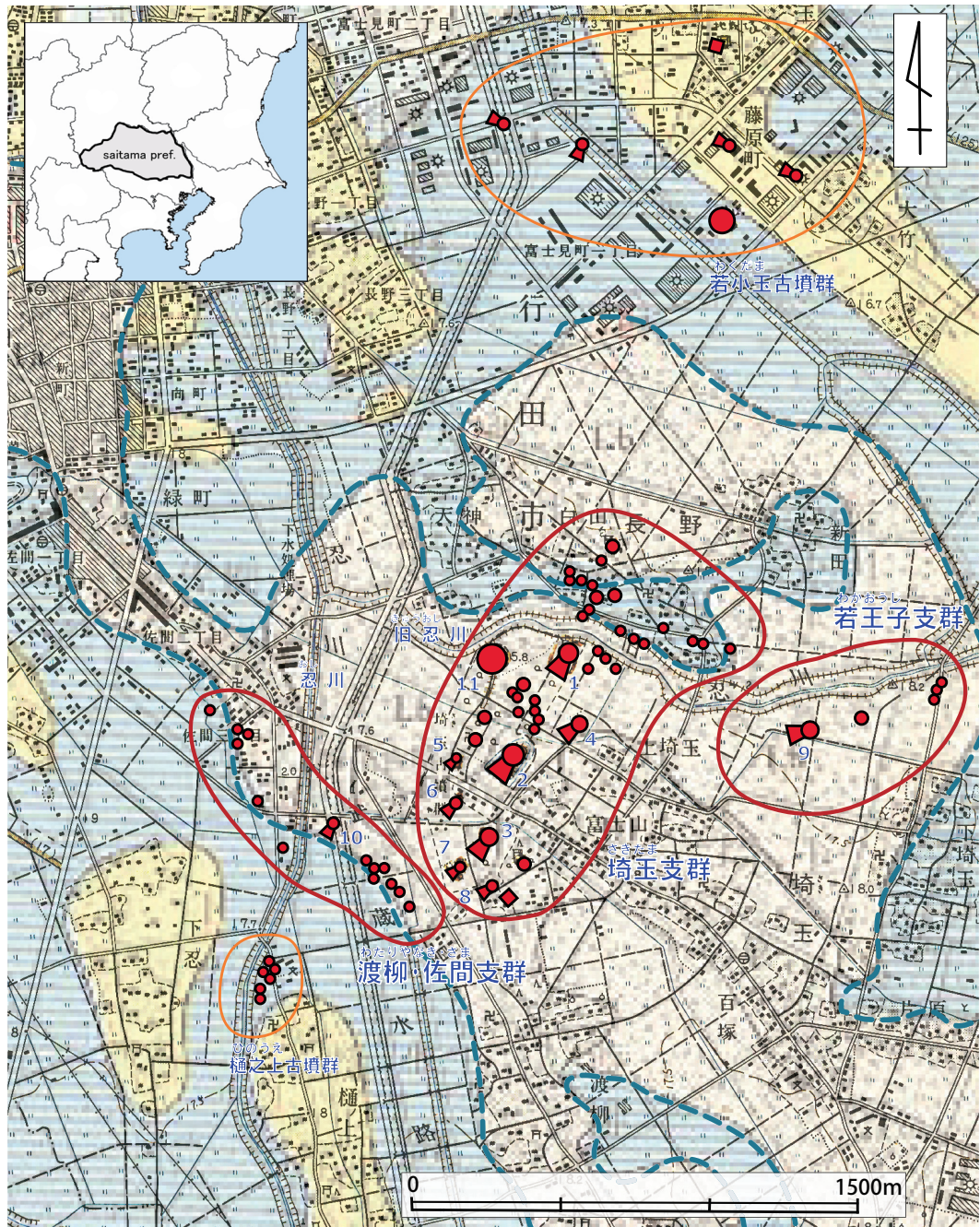
渡柳と佐間地区の一群は忍川が中央を流れているが、忍川は近代（大正末から昭和初期）の開削であり（埼玉新聞社 1974）、埼玉支群と同一のローム低台地縁辺部に築造されていることが明らかで、埼玉支群とは近接するが台地縁部に沿って立地する一群であり、「渡柳・佐間支群」と呼称することにし、その中の大人塚古墳を対象とする。そして、埼玉支群東の若王子古墳を中核とするまとまりを「若王子支群」と呼称しておきたい。以上、同一のローム台地上に近接して所在している古墳を「埼玉古墳群」と把握し、そこに所在する10基の前方後円墳を今回の対象とする。

3 前方後円墳の規格、設計についての既往の研究

ここで前方後円墳に関する規格や設計についてのこれまでの研究をのうち、代表的なものについて、簡単にまとめておきたい。

嚆矢としては第二次大戦前に森本六爾が天皇陵古墳を含む全国各地の大型前方後円墳94基について「墳全長」（主軸裾長）、「後円径」（後円部裾径）、「前方端幅」（前方部前面裾幅）等を計測し、その比率を提示したことをあげることができる（森本 1929）。その後、小林行雄が森本の成果を使用し、天皇陵古墳と思しき20基について「全長／後円部径」や「前方部幅／後円部径」等を算出して折れ線グラフを用いて時間的変化を示した（小林 1937）。

また、前方後円墳の墳丘平面形に注目してその変遷図を提示したのは濱田耕作が最初であろう。Ⅰ～Ⅳ期（最古期→古期→最盛期→後期）に時期区分して、天皇陵古墳も例にあげ、8つの「形式」を概説書中で示した（濱田 1936）。



第1図 埼玉古墳群の3支群（赤線）と地理学的立地状況（点線：ローム台地、黄色：自然堤防）

- 1 稲荷山古墳 2 二子山古墳 3 鉄砲山古墳 4 將軍山古墳 5 愛宕山古墳 6 瓦塚古墳 7 奥の山古墳
8 中の山古墳 9 若王子古墳 10 大人塚古墳 11 丸墓山古墳（円墳）

戦後は天皇陵研究に就いての足枷が取り払われたことにより、前方後円墳のこの分野での研究が活発化してゆく。墳丘の平面形態を分析して変遷を述べるものに加え、墳丘規格の数量的分析を行う業績も数多くみられるようになっていった。

前者では、小林行雄が古墳時代前期から後期への前方後円墳の変化を「前方部の低く細いものから、高く廣いものへ變つて行つたというのが、前方後円墳の外形變化の動向であつたのである」と、概説書で天皇陵古墳の側量図を示しながら述べており（小林 1951）、白石太一郎も畿内大型前方後円墳の墳丘形態の変化を、前期：箸墓⇒渋谷向山⇒宝来山タイプ、中期：仲ツ山⇒土師ニサンザイタイプ、後期：高屋城山タイプとして示し、前期中葉以前は後円部と前方部が別個であり、宝来山タイプ以降は「後円部と前方部が一体化し、前方後円形の墳丘を三段に重ねた形態が定着する」ことなどを復元図を提示して述べている（白石 1985）。

その後、畿内の大王墓と目される大型前方後円墳の詳細な変遷を論じた代表は岸本直文である（岸本 1992）。円筒埴輪の編年研究の進展や精度が高まった側量図が支えとなっているものと考えられるが、修正を加えながら近年、畿内の大王墓と考える大型前方後円墳の「神聖王」と「執政王」、二つの系列の変遷を示している（岸本 2020）。ただし、氏が半身比較図⁽²⁾を用いて展開する規格論は、図の精度や「誤差範囲」とした不一致部分が散見され、検証すべき点が残されている。

次に戦前の森本・小林の後継研究というべき、墳丘規格の数量的分析を中心とするものとしてはまず、上田宏範の業績をあげねばならない。前方後円墳の主軸線上の各点の比率で型式分類しようとするもので、前方後円墳の後円部径を6単位とし、前方部稜線の交点を測定点として、その長さ連比で検討を行う視点は評価できる。しかし、多くの実測図の精度が低く、墳丘裾の測点や前方部隅角線の取り方が曖昧で、自説に有利となるように測点を拾っている可能性もある。加えて、前方部の形態を決定する括れ部幅を無視しており、形態分類は不備とならざるを得ない（上田 1969）。

その後、主軸長を8単位と断定して前方後円墳の三設計型を主張する梶国男の研究（梶 1975 ①）や後円部を8単位に区分して前方部長とその平面形態を分類する石部正志・宮川渉らのグループによる研究（石部ほか 1978、1979）があり、近年では沼澤豊が後円部を24単位で分析する研究（沼澤 2011①）が登場している。これらの研究は前方後円墳の平面側量図に、それぞれが主張する設計単位の方眼を重ねて分析する手法が共通しており、沼澤の場合は各段の斜面幅やテラス幅といった箇所にも言及して分析を深め、前方後円墳と帆立貝式古墳を区別する新たな視点も提示している。

以上の墳丘規格の数量的分析を行う際に重要なのは側量図の精度である。どこに測定点を置くのか、復元円弧や復原線をどのように引くかで結論が変わる可能性があるので、特に傾斜の変換線などは正確な側量情報に裏付けられていなければならない。そこで近年注目されるのが、最新

鋭の測量機器を駆使した「デジタル側量」により作成した墳丘側量図を用いた解析手法である。新納泉はこの手法で岡山県岡山市造山古墳の側量図を作成し、信頼性のある築造原理にたどり着いている（新納 2011）。城倉正祥も埼玉県東松山市野本將軍塚古墳を同様の技術で測量し、その築造原理が畿内前期の前方後円墳であるメスリ山古墳の系譜であることを指摘できたのも（城倉 2018）、この高精度側量技術の成果である。

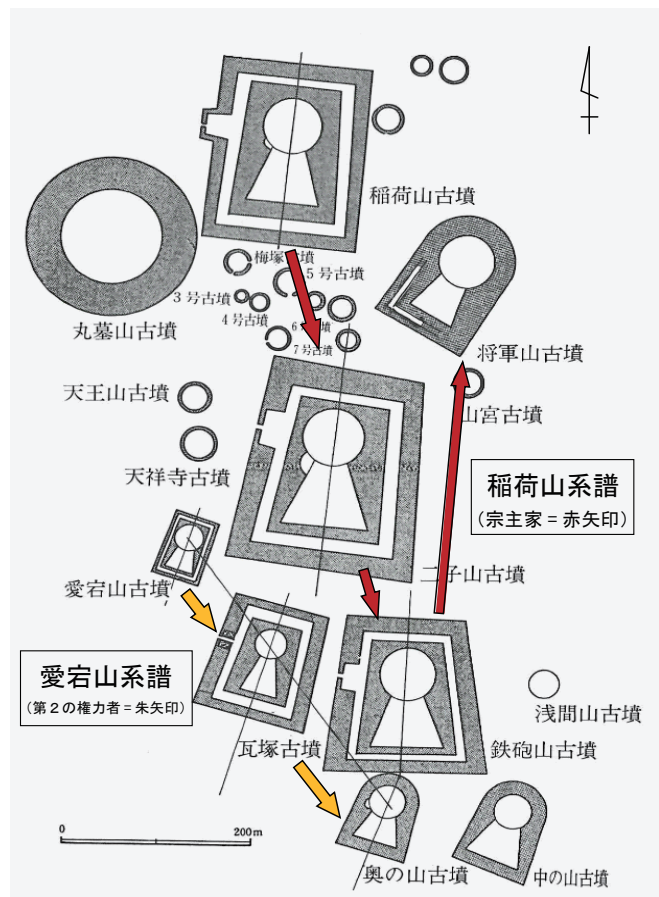
なお、墳丘規格の研究の多くで、使用された尺度についての論述が展開されているが、本稿では尺度論に立ち入らないことにしたい。

4 埼玉古墳群の前方後円墳の規格や階層性に関する既往研究

ここで、埼玉古墳群の前方後円墳の変遷や階層性についてのこれまでの研究について、少し触れておきたい。

筆者はかつて、二子山古墳の調査報告の際に同古墳の規格が、上田宏範の主張する「主軸長：後円部径：前方部長 = 6 : 3 : 3」に合致し（上田 1969）、梶国男の「第七型式」すなわち「全長：括部幅：前方部前端幅 = 8 : 3 : 5」（梶 1975②）なので、大仙(仁徳)陵古墳型の平面形と断じたことがあったが（杉崎 1987）、上田の使用した測量図の精度には問題があり、梶は主軸長を8区画とした方眼を用いた規格論に測量図の周堀汀線を無理に当てはめようとした点や、後円部径が比率中に反映されていない欠陥がある。したがって、二子山古墳を「大仙陵型」と呼ぶことに躊躇を覚えるのであり、この際、両者に同調した筆者の見解は撤回しておきたい。

増田逸朗は前方後円墳の築造位置関係から、主軸長が100m級を大型前方後円墳、それ以外を中型前方後円墳として前方後円墳に権



第2図 増田逸朗の埼玉古墳群変遷関係

力の階層構造を見出そうとし、埴輪や須恵器、埋葬施設のあり方から、大型前方後円墳の変遷を、稲荷山→二子山→鉄砲山→將軍山古墳の順での変遷（「稲荷山系列」）したことを主張し、鉄砲山を二子山の約4/5の縮尺と考えた。そして、中型前方後円墳は、主軸方向の近似性や後円部頂がほぼ一直線上に並ぶことから、愛宕山→瓦塚→奥の山古墳の順に構築（愛宕山系列）された可能性を考えた。古墳の位置関係や断片的な資料からの推論は、現在では失当部分が目につくが、発掘調査が進展していない段階だったので無理もなく、階層構造を見出し、変遷を考察した点を評価しておきたい（増田 1987）。

その後、前方後円墳の主軸で半裁した測量図を突き合わせて、二基の類似性を検討するいわゆる「半身比較図法」（註2）で埼玉古墳群の前方後円墳の規格の具体的検討に踏み込んだのが塚田良道と岡本健一であった。塚田は「さきたま古墳群の全長100m級の前方後円墳は、そのいずれもが大仙古墳の築造規格に基づき、大きさを替えて築造されたものと理解できる」とし（塚田 1997）、古墳時代「後期になると、埼玉稲荷山古墳や茨城県富士見塚古墳で、大仙(大山)古墳の形を縮尺した古墳が築かれ、さきたま古墳群では將軍山を除いて、稲荷山の型が継続的に築かれる」と述べた（塚田 1999）。そして、岡本は將軍山古墳の調査報告で稲荷山古墳が大仙古墳と同じ規格であるとし、「稲荷山・二子山・愛宕山・鉄砲山・瓦塚・奥の山の6古墳は、全く同じ規格となり、すべて相似形であることがわかった」と判断した（岡本 1997）。



第3図 岡本健一の埼玉古墳群前方後円墳の比較検討

しかし、この半身比較図法は畿内大王陵クラスの崩壊部分が少ない（あるいは、多少の崩壊は側量図では無視できる規模の）大型前方後円墳であればまだしも、崩壊・変形が著しい主軸長100mクラス程度以下の前方後円墳では正しい結論に至る可能性は低い。そもそも、きちんと後円部の円弧や前方部の規格となる輪郭線を抽出せずに比較操作すること自体、瑕疵を含む可能性が極めて高いものであるといわざるを得ない。

近年では、城倉正祥が円筒埴輪の変遷の視点、すなわち凸帯条数とその器高で、埼玉古墳群の階層構造と変遷を示している（城倉 2018b）。主軸長100m超規模の大型前方後円墳の稲荷山、二子山、鉄砲山古墳の3基のみに、多条凸帯の円筒埴輪が使用されていることから、この3基が時系的に最高位の首長権を継いだ首長墓であったとしているが、墳丘自体の比較検討には踏み込んでいない。

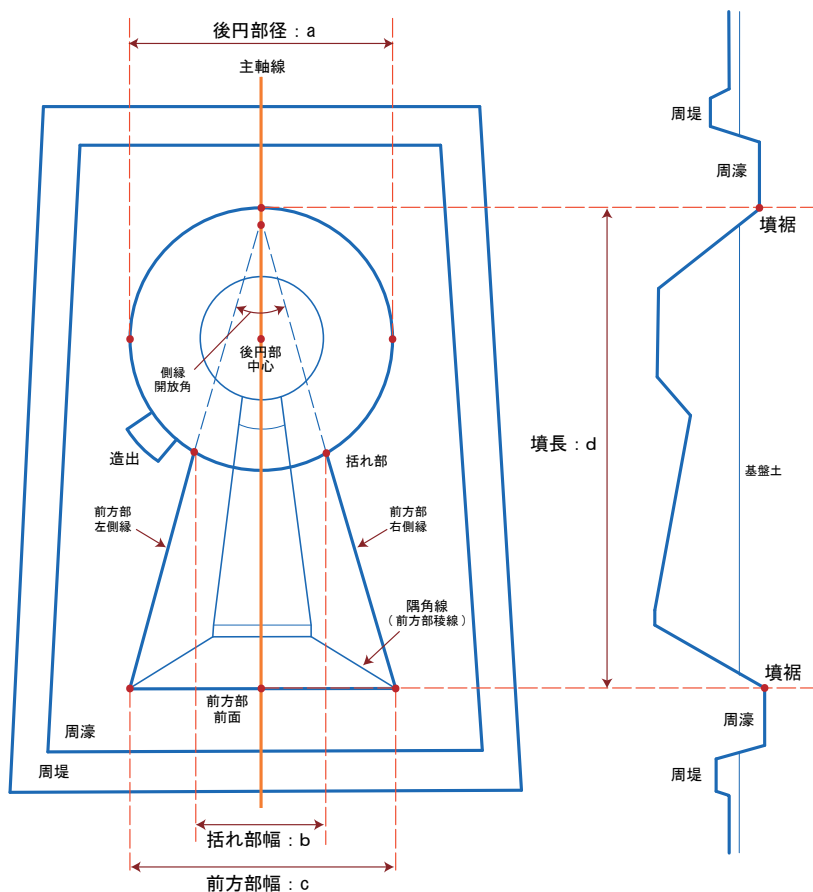
5 埴裾規格の抽出とその比較方法

前方後円墳の築造現場での手順としては、旧表土（またはその整地面）上から外形規格線を掘削して形成するための（外形規格とほぼ相似形の）計画線を描くのが、最初の作業であったと考えられる。その後に丁張りを設置して基底段の下端部までの周堀部分の掘削と盛土の開始が行われたものと思われる。埼玉古墳群では鉄砲山古墳後円部（埼玉県教育委員会 1985a）や愛宕山古墳前方部の発掘調査（埼玉県教育委員会 1985b）で、こうした作業の痕跡ではないかと思われる細い溝状遺構が周濠底の埴裾に近い場所で見出されているが、全ての埴裾で検出されているものではない。そこで埼玉古墳群の前方後円墳同士でその墳丘規格を比較する際の実証的部位としては、発掘調査で明らかとなった埴裾部つまり、周濠底の埴丘立上り部分（墳丘外形）の比較検討により埴丘規格の変遷を推定してみたい。そもそも同一古墳群中の時期的に近接する前方後円墳群なので、最初に築造された前方後円墳である稲荷山古墳の規格がベースとなって、各古墳で縮尺を変えて相似形にしたり、前方部を変形させたりしての築造が予想されるところである。

使用した実測図は、近年刊行された『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』（埼玉県教育委員会 2018）に収載されるものを使用し、発掘調査で確認された埴裾部分を根拠にして、後円部を正円弧に、前方部前面と側縁線を直線に推定復元したプランを重ね合わせる方法で検討を行った。不確定要素の大きい、埴丘に付設される造出^{つくりだし}は、その位置については考慮するが、規模や形態にまでは踏み込まないことにし、周濠の形態等についても検討対象としていない。

6 各前方後円墳の埴丘外形規格

以下、各前方後円墳の外形プランについて略述していくことにする。前方後円墳の各部の呼称や測点は第4図に示したとおりであり、稲荷山古墳以下各前方後円墳のほぼ確実な復元は実線で示し、データが不足と考えるものは破線の復元線で示してある。

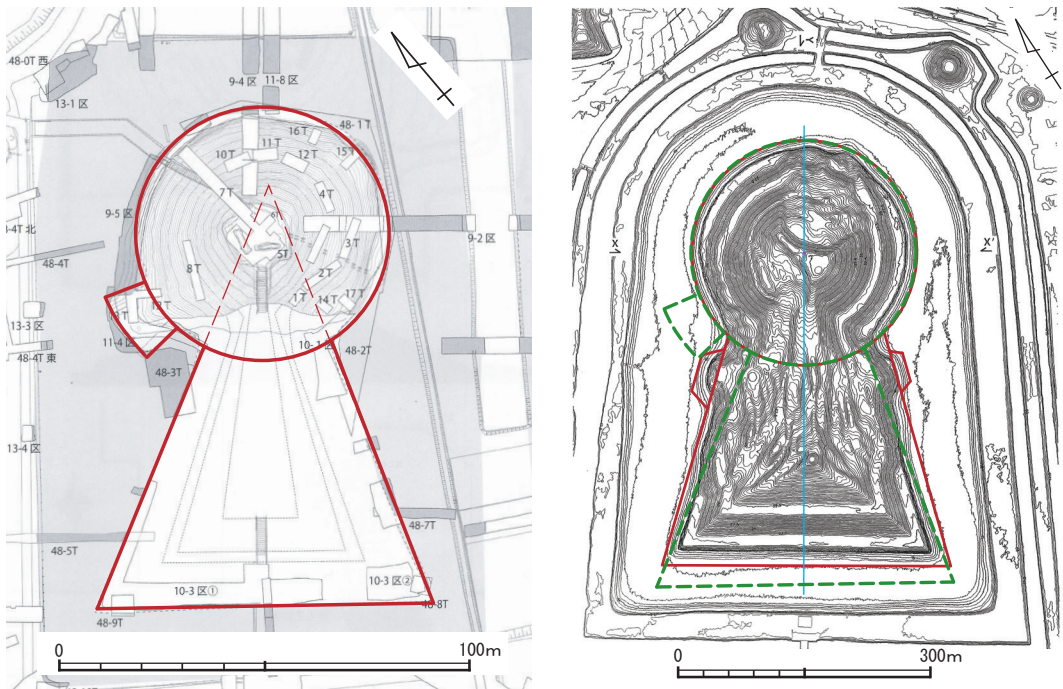


第4図 前方後円墳の各部の呼称と測点

稲荷山古墳 埼玉支群中の前方後円墳としては最も北に位置する。長方形の2重の周濠をめぐるせ、後円部西側に造出を備える。造出付近出土の須恵器がTK47の古段階とされることから、築造時期は5世紀後葉とみられ、古墳群中で最初に築かれた前方後円墳である。

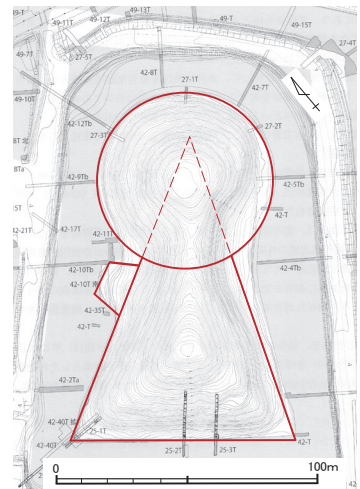
墳丘外形での後円部径は61m、括れ部幅31m、前方部前端幅82m、主軸長122mとなった(1m以下は四捨五入、以下同様)。後円部径を1とした場合の $b:c:d$ 比は $0.5:1.3:2$ で、括れ部幅を後円部の半分に、前方部前面幅を1.3倍としていることがわかる。前方部側縁線の開放角は 41° 前後とみられる(第5図左)。

また、近年、周濠水面下のおおよその墳裾位置が判明した大仙陵古墳と後円部円弧を同一にしてプランを比較してみると前方部前端の位置はもちろん、前方部左右側縁と括れ部のプランは稲荷山古墳の方が括れ方がやや強く、合致しそうにない(第5図右)。前節で述べたが、塚田良道や岡本健一が半身比較図法により両者を「相似形」と主張するのは、無理といわざるを得ないのではなかろうか。



第5図 稲荷山古墳の外形（左）と大仙陵古墳（実線）・稲荷山古墳（点線）の比較（右）

二子山古墳 二子山古墳は稲荷山古墳の南側に位置し、古墳群中のみならず、この時期の東国屈指の大型前方後円墳である。出土須恵器から6世紀前半の築造時期が考えられており、古墳群中では稲荷山古墳の次期最高位首長墓と判断される古墳である。前方部左側の後円部寄りには、造出が付設されている。墳丘の東南側にかつて寺院が所在したことが知られており、前方部左側中央から後円部にかけて変形を受けていることが、等高線から読み取ることができる。後円部径は67m、括れ部幅35m、前方部前端幅86m、主軸長138mとなった。後円部径を1とした場合のb:c:d比は0.5:1.3:2.1となっており、括れ部幅を後円部の半分に、前方部前面幅を1.3倍に企画しているのは稲荷山古墳と同じであり、後円部を同大にして重ねると、稲荷山古墳とほぼ相似形であることがわかる。（第15図、以下各古墳でも同図を参照）



第6図 二子山古墳の外形

鉄砲山古墳 鉄砲山古墳は二子山古墳の南東に所在しており、近年横穴式石室が発見され、出土須恵器の特徴から、6世紀後葉の築造と判明している。造出が右括れ部に近い前方部右側、二子山古墳とほぼ同様の位置に付設されているが、忍藩の幕末の鉄砲の射撃場があったため、えぐら

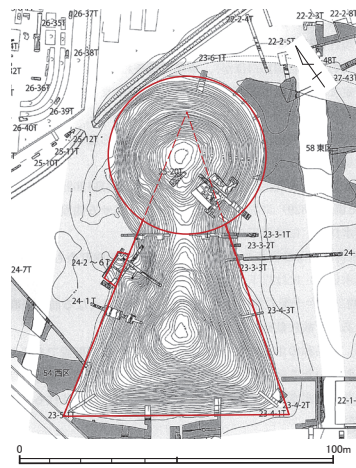
れるように変形している。二子山古墳よりは規模が縮小されている可能性が高い。

前方部前面の外形位置はこれまでの発掘調査でほぼ確定しており、後円部径は50m、括れ部幅27m、前方部前端幅72m、主軸長108mとなった。後円部径を1とした場合の $b:c:d$ 比は $0.5:1.4:2.2$ で、括れ部幅を後円部の半分に企画しているのは稲荷山・二子山古墳と同じであり、後円部を同大にして重ねると、前方部を約20%伸長したプランであることがわかる。横穴式石室の奥壁を主軸上に置く設計としたため、後円部を縮小せざるを得なくなり、全長を確保するための操作であった可能性を考えたい。

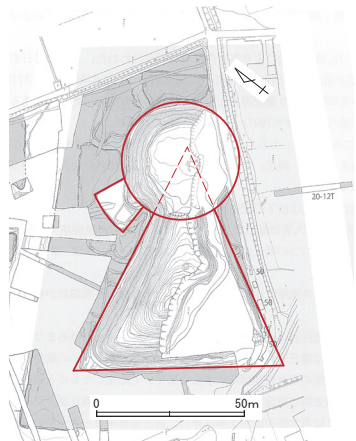
将軍山古墳 二子山古墳の北東に位置する前方後円墳で民家の建設で後円部の上半と左側面部分、前方部の左側が大きく破壊されている。1894年に主体部が発掘され、片袖式の横穴式石室から多量の副葬品が出土している。埼玉県による復元事業に伴う発掘調査で出土した須恵器から、6世紀後半代の築造時期が推定できる。発掘調査面積が広いので、基底部プランはほぼ確定している。主軸方向角は100m超の上記3古墳より西方に振っている。後円部径は39m、括れ部幅21m、前方部前端幅67m、主軸長91mで、後円部径を1とした場合の $b:c:d$ 比は $0.5:1.7:2.3$ で、括れ部幅を後円部の半分に企画しているのは稲荷山古墳と同じであり、後円部を同大にして重ねると、前方部を約30%伸長したプランであると判明する。鉄砲山古墳同様、横穴式石室の採用で後円部を縮小したものの、墳長を大きく見せるための操作であったと思われる。

また、前方部側縁開放角は 50° を越えるようで、他の前方後円墳とは開き方が大きく、墳丘規格が稲荷山古墳とは別系統のものを採用している可能性がある。

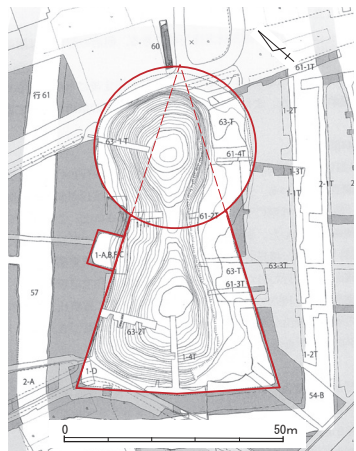
瓦塚古墳 二子山古墳の南に位置しており、墳丘は左側と後円部の周囲とが土取や道路などで崩され変形が著しい。発掘調査面積が広いので、基底部プランはほぼ確定していて、埼玉県による復元事業に伴う発掘調査で出土した須恵器から、6世紀中葉の築造時期が推定できる。後円部径は37m、括れ



第7図 鉄砲山古墳の外形



第8図 将軍山古墳の外形



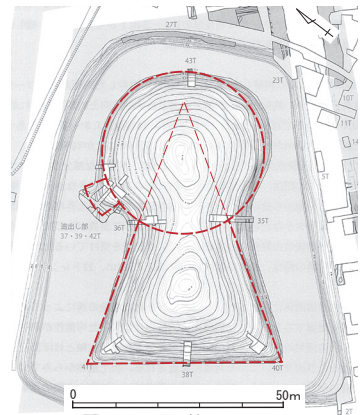
第9図 瓦塚古墳の外形

部幅22m、前方部前端幅43m、主軸長75mで、後円部径を1とした場合の $b:c:d$ 比は $0.6:1.2:2.0$ で、前方部前面中央がわずかに突出するプランである。稲荷山・二子山古墳の後円部を同大にして重ねるとほぼ全体で重なり、相似形のプランと考えてよいだろう。

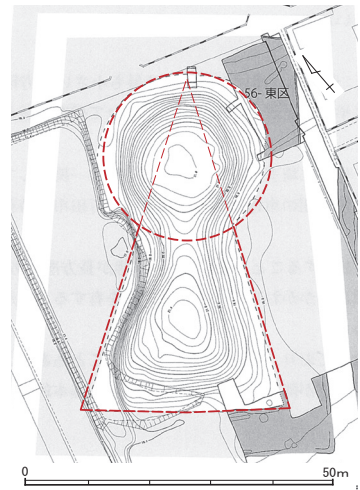
奥の山古墳 鉄砲山古墳の南に位置し、稲荷山古墳と同様の位置である後円部右側の括れ部寄りに造出が付設される。築造時期は出土須恵器からほぼ瓦塚と同様と考えられる。埼玉県による「風土記の丘事業」で遺構としての周堀が掘り抜かれ、水堀の周堀が復元されているため、後円部後ろ側のトレンチで確認された基底下端に対応する標高18mの等高線を目安にして復元線を考えた。後円部径は約39m、括れ部幅約22m、前方部前端幅約46m、主軸長約70mで、後円部径を1とした場合の $b:c:d$ 比は $0.6:1.2:1.8$ である。造出の位置から稲荷山古墳との親縁性が予想されるので後円部を同大にして重ねると、前方部の側面プランはほぼ重なるが長さを約20%短縮した形態であると判断できよう。

愛宕山古墳 二子山古墳の西に位置する小型の前方後円墳で墳丘右側はあまり遺存がよくなく、造出の状況も明確になっていない。円筒埴輪から6世紀後半代の築造時期が推定されている。面的に発掘調査された後円部東側と前方部左角部分から推定した基底下端ラインのプランは後円部径約27m、括れ部幅約15m、前方部前端幅約34m、主軸長約55mで、前方部前面中央がわずかに突出する形態と思われる。後円部径を1とした場合の $b:c:d$ 比は $0.6:1.3:2.0$ で、瓦塚古墳と後円部径を同一にして重ねると、ほぼ相似形に重なることがわかる。

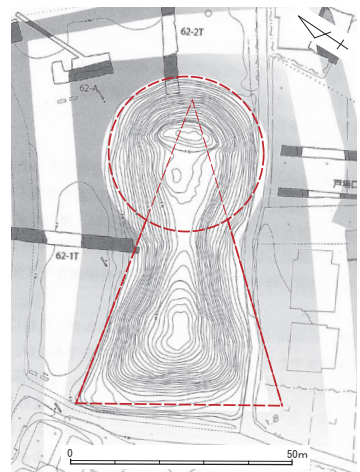
中の山古墳 鉄砲山古墳の南東に位置しており、トレンチ発掘調査が行われており、出土した壺形須恵器から、6世紀末を中心とした築造時期が推定されている。基底部については後円部北東部のトレンチでしか確認されていないので、復元には情報が不十分である。墳丘裾での等高線の状況から基底下端ラインの推定を試みたのが第11図で、鉄砲山の後円部を



第10図 奥の山古墳の外形



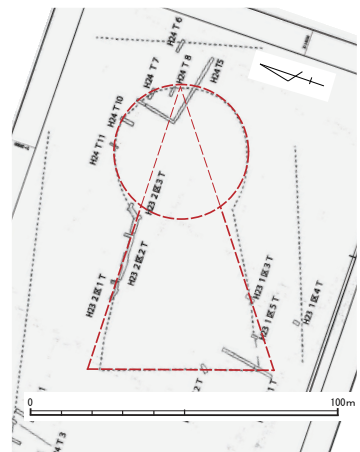
第11図 愛宕山古墳の外形



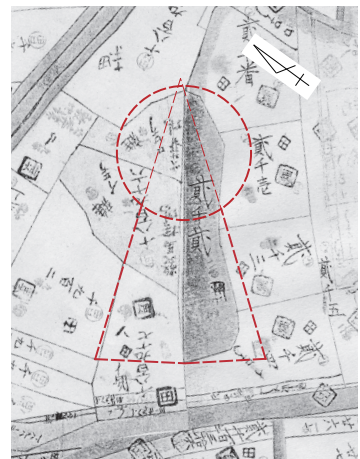
第12図 中の山古墳の外形

同大にして重ねると、ほぼ相似形となるものと推定しておきたい。この推定ラインでの $b:c:d$ 比は $0.5:1.3:2.1$ である。

若王子古墳 将軍山古墳東方にかつて所在していた前方後円墳で、1934年に土取工事で削平され、墳丘は存在していない。かつて、筆者は古い公図を頼りに墳丘規模の復元を行ったことがあるが（杉崎 1986）、近年埼玉県教委がトレンチ調査を行って、そのプランの一部が明らかになっている。土取工事の際に出土したと伝えられる須恵器は6世紀後葉の時期を示しているが、埼玉県教育委員会の調査では埴輪が全く出土しなかったといい、埴輪を古墳に樹立をしなくなる7世紀初頭くらいまで築造時期を下げて考える必要があるかもしれない。埼玉県教育委員会の報告書（埼玉県教育委員会 2018）では後円部が楕円になるとしているが、後円部と前方部の結節部は、外方からの小さな円弧でなめらかにつながるため、規格自体は正円弧であろう。後円部後方から左側にかけての基底部の位置で円弧を復元し、前方部右側面のプランをもとに中軸線で折り返すと第13図のように基底下端ラインが復元でき、これは鉄砲山古墳とほぼ相似形と推定される。



第13図 若王子古墳の外形



第14図 大人塚古墳の外形

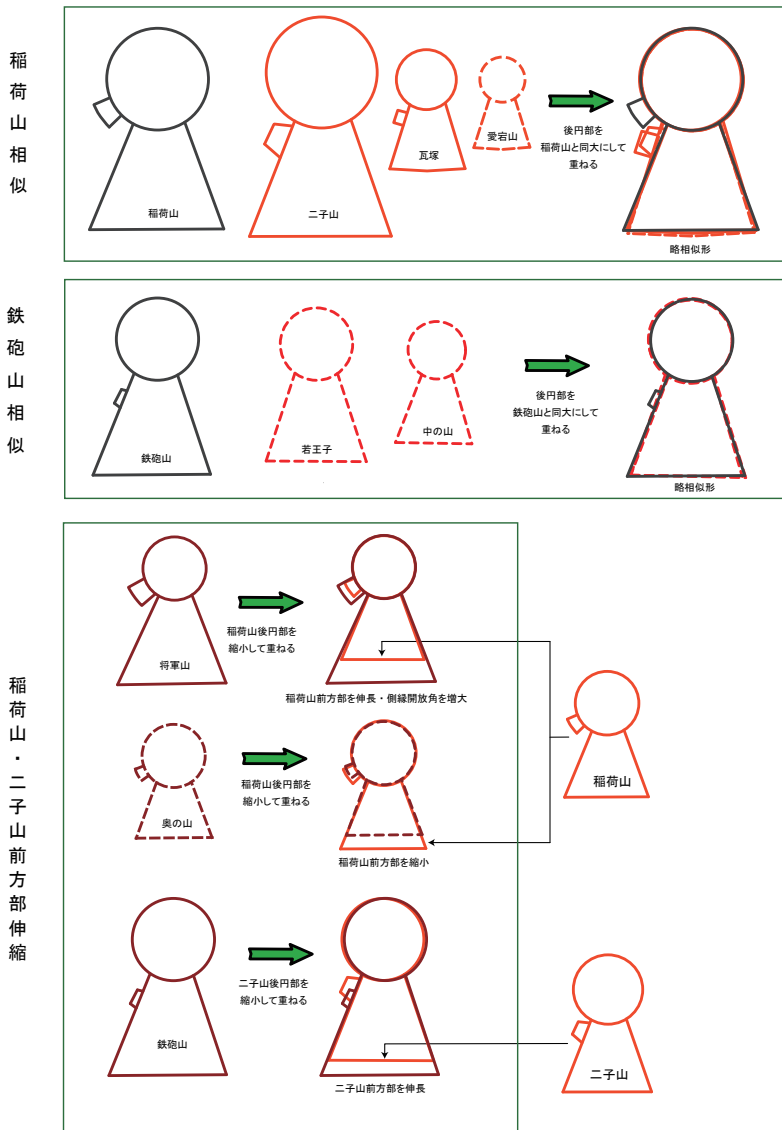
大人塚古墳 かつて、奥の山古墳の西方、大字埼玉と佐間のちょうど境に所在した前方後円墳で、1912年頃に削平されたといわれる。行田市教育委員会の発掘で出土の埴輪から6世紀後葉の築造時期が推定されている。この古墳についても、以前に筆者が公図から復元を行ったことがある（杉崎 2006）。

第14図はその際に提示した公図上で、改めて古墳の規模を推定したものである。地境を根拠にした推定復元のプランなので、精度に不安があるが、これまで検討してきた前方後円墳の中では、愛宕山古墳とほぼ相似形となる可能性がある。公図の縮尺は約1/600といわれるので、墳丘主軸長は約51mとなり、愛宕山古墳の規模に近い数字となる。

7 外形規格の変遷

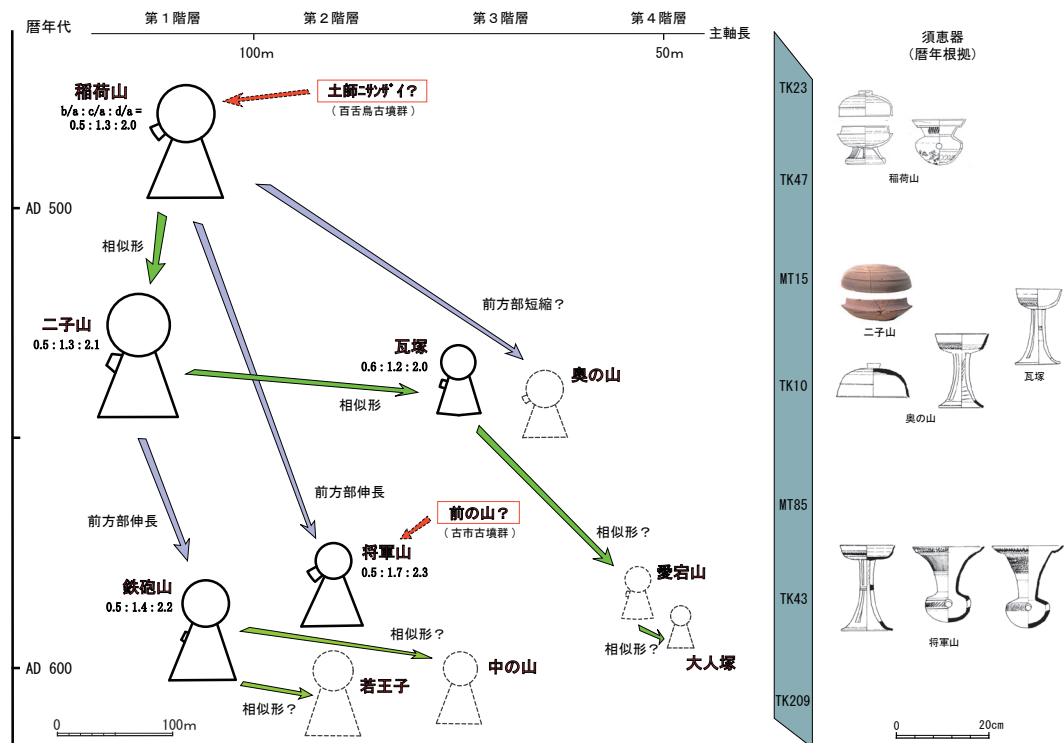
以上、埼玉古墳群の前方後円墳の墳丘外形規格について、推定を交えて述べてきた。ここであらためて、階層構造とを併せて整理しておきたい。前方後円墳の外形規格の関係を第15図に整理した。古墳群中の前方後円墳の階層構造は、その主軸長による墳丘規模から4つの階層が想定され、変遷と関係性を第16図に示した。

墳丘外形規格からみた埼玉古墳群における前方後円墳の築造動態



古墳名	後円部径a	くびれ部幅b	前方部幅c	主軸長d	主軸方向角	b/a	c/a	d/a	側縁開放角
二子山基底	67	35	86	138	N-40° -E	0.5	1.3	2.1	40
稲荷山基底	61	31	82	122	N-42° -E	0.5	1.3	2.0	41
鉄砲山基底	50	27	72	108	N-36° -E	0.5	1.4	2.2	40
將軍山基底	39	21	67	91	N-53° -E	0.5	1.7	2.3	47
中の山基底	35	19	47	75	N-58.5° -E	0.5	1.3	2.1	37
瓦塚基底	37	22	43	75	N-47.5° -E	0.6	1.2	2.0	37
奥の山基底	39	22	46	70	N-53° -E	0.6	1.2	1.8	40
愛宕山基底	27	15	34	55	N-50.5° -E	0.6	1.3	2.0	37
若王子基底	44	26	61	93	N-70° -E	0.6	1.4	2.1	37
大人塚基底	24	15	29	51	N-50° -E	0.6	1.2	2.1	36

第15図 前方後円墳外形規格の比較と各部位の計測数値（単位＝m）



第16図 前方後円墳外形規格の変遷想定

前方後円墳の階層制と墳丘外形規格 埼玉古墳群の100m超規模の大型前方後円墳の稲荷山、二子山、鉄砲山古墳が最高位首長権を継いだ首長墓であると考え、城倉正祥の、多条凸帯円筒埴輪がこの3基のみでの樹立されている、という指摘や(城倉 2018a)、増田逸朗が、3基が北から南に直線的に近接し、主軸方向をきちんと揃えて築造されているという位置関係から指摘したように(増田 1987)、ほぼ確実である。埴輪規格の視点では、稲荷山古墳で採用された規格がそのまま規模を拡大して6世紀前半の二子山古墳に、そして二子山古墳の前方部を伸長するかたちで6世紀後葉の鉄砲山古墳に受け継がれたことが指摘できる。

下位の階層構造としては、将軍山、若王子古墳の規模が90m台で、墳丘規模の点で上記最高位とした前方後円墳とは格差を認めざるを得ず、ここでは「第2階層」と位置づけておきたい。(ちなみに将軍山古墳の円筒埴輪は4条凸帯で、これ以下の墳丘規模の前方後円墳の円筒埴輪は4条で愛宕山古墳では3条が基本である。)この階層では、後円部造出を同じ位置に付設する将軍山古墳が、稲荷山古墳の後円部を縮小、前方部を伸長、側縁開放角を若干広げてして築造している。前方部が大きく開く印象があって異質感を覚えるが、稲荷山古墳で採用されたプランを内部的に改変して使用している可能性と、新たに外部から導入した可能性が考えられるが、この点については後述する。若王子古墳は発掘調査による情報が不足しているが、鉄砲山古墳のプラン

をそのまま採用している可能性を指摘しておきたい。

70m級の前方後円墳では瓦塚、奥の山、中の山古墳の3基を「第3階層」と位置づけておきたい。瓦塚古墳は造出の位置から稲荷山古墳よりむしろ二子山古墳の相似墳として設計されたものと理解しておきたい。奥の山古墳は後円部付設の造出の位置から稲荷山古墳の前方部を縮めた設計、中の山古墳は鉄砲山古墳と相似形と推定される。

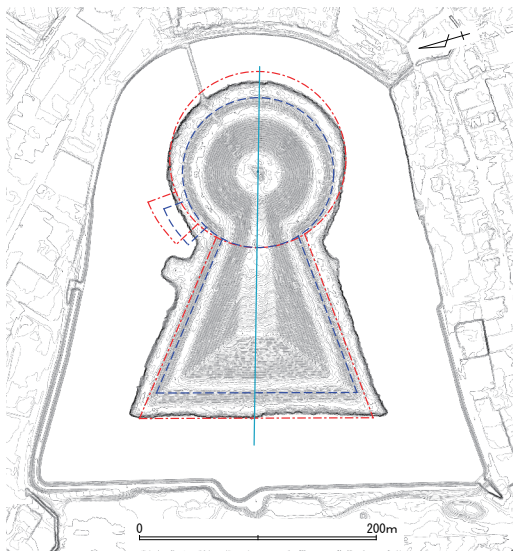
50m級の小型前方後円墳の愛宕山、大人塚古墳は「第4階層」とした。愛宕山古墳は瓦塚古墳の相似形プラン、大人塚古墳は規模の点で愛宕山古墳との相似形プランを推定しておきたい。

稲荷山古墳墳丘外形規格の由来 さて、ここで稲荷山古墳の外形規格がこの時期の畿内のどの前方後円墳と類似性があるのかを探っておきたい。平面的な類似性にかかわるのは前方部側縁線の開放角であり、大王陵クラスの前方形後円墳で測量図からプランが読み取れるものから探してみると、まず候補として考えられるのが堺市所在の百舌鳥古墳群中の前方後円墳、土師ニサンザイ古墳（土師陵墓参考地）である。

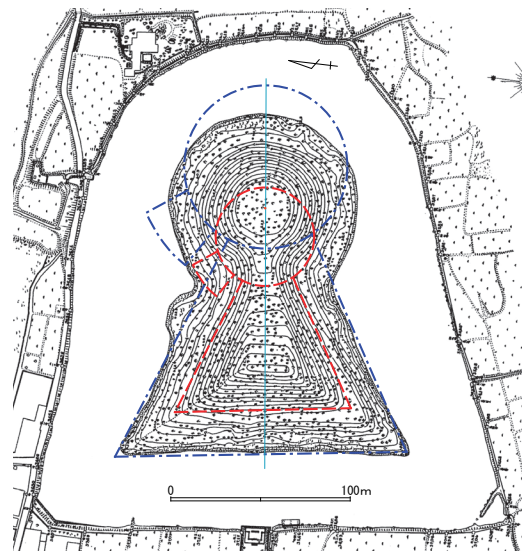
この前方後円墳は主軸長約290m、後円部径約156m、前方部幅約226mをはかり、前方部が前代の大仙陵古墳より開き気味で後出的形態を特徴としている。白石太一郎は「土師ニサンザイ型」と型式分類していて（白石 1985）、ほかに藤井寺市ノ市野山（允恭陵）古墳もこの型式に含めており、古墳時代中期でもその後半期の前方後円墳の形態としている。近年の古市古墳群の円筒埴輪と須恵器についてまとめた十河良和によれば、川西編年のⅣ期後半（古墳時代中期後半）の時期とされる「Bc 種ヨコハケ」を使用した多条凸帯円筒埴輪と TK23型式の須恵器の出土を根拠とした築造時期が考定されており（十河 2019）、稲荷山古墳よりわずかに先行した時期の築造が推定される古墳である。

実際に土師ニサンザイ古墳の測量図に稲荷山古墳の墳丘裾プランを重ねてみたのが第17図である。点線は後円部を同大にして三段築成の中段裾と重ねたもの、一点鎖線は前方部を同大にしてその中段裾と重ねたもので、前方部中段部での開き方が両側面でよく一致していることに気がつく。このことから、稲荷山古墳の墳丘裾プランは畿内中枢の大王墓クラスの前方形後円墳である土師ニサンザイ古墳の墳丘規格を援用した可能性が指摘できるのである。

将軍山古墳墳丘外形規格の由来 次に将軍山古墳の類似性についても考えておきたい。前方部側縁線の開放角がよく一致するのが、藤井寺市の古市古墳群中の前の山古墳（軽里大塚古墳・白鳥陵古墳）である（第18図）。主軸長約190m、後円部径約106m、前方部幅約165mをはかり、一瀬和夫は出土円筒埴輪に「Bd 種ヨコハケ」の存在を根拠に川西編年Ⅳ期の新しい頃に位置づける（一瀬 1992、2005）ほか、十河良和も前掲の論文で「Bd 種ヨコハケ」の主体の外面調整を根拠に、土師ニサンザイ古墳より後出する築造時期を推定している（十河 2019）。同じ古市古墳群中の藤井寺市寺岡ミサンザイ（仲哀陵）古墳も前方部側縁線がよく一致する事実もついでながら指摘しておきたい。



第17図 土師ニサンザイ古墳と稲荷山古墳外形の比較（点線：後円部中段裾との重ね、一点鎖線：前方部中段裾との重ね）



第18図 前の山古墳と将軍山古墳外形の比較（点線：前方部上段裾との重ね、一点鎖線：前方部下段汀線との重ね）

将軍山古墳の築造された6世紀後半代の畿内大型前方後円墳としては古市古墳群の高屋城山（安閑陵）古墳や橿原市の五条野丸山（見瀬丸山）古墳など、括れ部幅が増大して釣鐘形に近い下段裾の平面形態が典型例だが、そうした形態を採用することなく、半世紀近い以前の前の山古墳のプランを活用しているのではないかとと思われる。その理由は明確に説明できないが、稲荷山古墳の規格が古墳群の前方後円墳の基本的な規格であるのに対して、将軍山古墳が一人異質な規格となっているのは、被葬者の特別な立場を表象しているのであろう。上記畿内の大型前方後円墳の築造者との関係、あるいは横穴式石室の構造や副葬品の分析なども加味しながら検討されねばならない課題である。

同じ東国内では、この将軍山古墳と千葉県富津市の内裏塚古墳群中の古塚・三条塚・稲荷山古墳の3基の前方後円墳との類似性を岡本健一が半身比較図法ですでに指摘しているが（岡本1997）、公開されている測量図での比較は慎重にならざるを得ないので、これらとの関係性についても墳丘調査の進展を待って論究してみたい。

8 まとめ

以上、埼玉古墳群の前方後円墳の墳丘外形規格が、古墳群内で最初に築造された前方後円墳である稲荷山古墳のそれを祖型とし、その相似形、または前方部を伸縮して（将軍山古墳は若干検討を要するが）、ほとんどの前方後円墳に継承されている可能性が高いことを指摘した。墳丘外形規格は前方後円墳の築造プランの一要素にすぎないので、その比較だけで、現在失われている

墳丘同志が相似形であるとか前方部を伸縮させているとかは断定はできない。しかし、墳丘の原形をとどめない前方後円墳同志の墳丘の関係性を直接検討する今回の方法は、現時点では実証的で有効な方法と考えている。

埼玉古墳群では、築造された前方後円墳の規模と集中度から埼玉支群が宗家の墳墓群、若王子支群や渡柳・佐間支群は庶家の一群と判断してよいと思うが、稲荷山古墳の墳丘形態が、最高位首長墓の系列と下位階層の前方後円墳間で、同族の前方後円墳の基本的規格として使い続けられた可能性をあらためて強調しておきたい。

白石太一郎は東国出土の銘文刀剣である千葉縣市原市稲荷台1号墳出土の王賜銘鉄剣と埼玉稲荷山古墳出土の辛亥銘年銘鉄剣の銘文を比較し、5世紀前半の時期の製作された前者の銘文では畿内王権の首長が単に「王」だが、5世紀後半の后者では「大王」と見えることから、畿内王権と地域首長の関係が5世紀後半の雄略朝の段階で、それ以前の「首長連合」から変質をして「地方の有力豪族も、畿内の王の同盟者などではなく、畿内の大王に服属する地方豪族の立場が明確になる」ことを述べている（白石 2013）。畿内王権と埼玉の首長との関係が白石の主張するような状況にあったとすると、稲荷山古墳築造時点の5世紀後葉段階では、畿内王権と埼玉の首長間で前方後円墳の規格を共有することができたが、6世紀になって不可能となり、それ以後の前方後円墳の墳丘形態に稲荷山古墳の築造プランをベースとして採用し続けたのではないかと、言い換えれば、畿内政権と埼玉古墳群の首長間の政治的紐帯関係の維持に、前方後円墳の規格の共有が無意味化していたのではないかということである。その背景として、日本書紀の安閑紀に記される武蔵の首長の国造職をめぐる内紛の結果として同地にヤマト王権の直轄地である屯倉が4カ所も置かれたという記述が示すように、畿内王権の立場が絶対優勢な状況となり、埼玉の首長に6世紀型の大王墓の築造が許されない状況が生じていた可能性があるのではなかろうか。

《註》

- (1) 広辞苑には【規格】は「形・質・寸法などの定められた標準」とある。同音の【企画】は「計画を立てること」とあって抽象的な意味合いが強そうである。よって本稿では「規格」を統一して使用する。
- (2) 「半身比較図法」を考案したのは岸本が最初と思われる（岸本 1992）。これに対して沼澤豊の批判がある（沼澤 2012②）。

《引用・参考文献》

- 石部正志ほか 1978「前方後円墳築造企画の基準と単位」『考古学ジャーナル』150ニューサイエンス社 pp27-34
- 石部正志ほか 1979「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究 第89号』古代学研究会 pp1-22
- 一瀬和夫 1992「河内平野とその周辺の埴輪編年概観」『古代文化 第44巻第9号』（財）古代学協会 pp8-12
- 一瀬和夫 2005「円筒埴輪の編年」『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館 pp102-133
- 上田宏範 1969「型式学的研究の基礎理論と展開」『前方後円墳』学生社 pp60-82
- 岡本健一 1997「築造規格」『將軍山古墳《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》確認調査編・付編』埼玉県教育委員会 pp82-86

- 岸本直文 1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究 第39巻第2号』考古学研究会 pp45-63
- 岸本直文 2020「前方後円墳の系列と変遷」『倭王権と前方後円墳』塙書房 pp101-130
- 棚田男 1975『古墳の設計』築地書館 ①「3・前方後円墳の研究へ 前方後円墳の三設計型」pp65-68、②「4・各古墳の設計例 仁徳陵」pp90-93
- 小林行雄 1937「前方後円墳」『考古学 第八巻 第1号』東京考古学会 pp1-14
- 小林行雄 1951「古墳時代の葬制（一）」『日本考古学概説』東京創元社 pp224-233
- 埼玉県教育委員会 1985a「後円部東側調査区（昭和五八年度）」『鉄砲山古墳』pp13-19
- 埼玉県教育委員会 1985b「前方部南側調査区」『愛宕山古墳』pp8-12
- 埼玉県教育委員会 2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』
- 埼玉新聞社 1974「忍川」『埼玉大百科事典1』p314
- 城倉正祥 2018a「埼玉古墳群出土の円筒埴輪の特徴と編年の位置づけ」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会 pp201-210
- 城倉正祥 2018b「野本將軍塚古墳の墳丘とその年代」『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 pp3-33
- 白石太一郎 1985「古墳の墳丘」『古墳の知識』東京美術 pp11-48
- 白石太一郎 2013「ヤマト政権の変質」『古墳からみた倭国の形成と展開』敬文舎 pp252-272
- 杉崎茂樹 1986「行田市若王子古墳について」『古代 第82号』早稲田大学考古学会 pp143-151
- 杉崎茂樹 1987「墳丘」『二子山古墳』埼玉県教育委員会 p71
- 杉崎茂樹 2006「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告 第19号』埼玉県立さきたま資料館 pp10-20
- 十河良和 2019「百舌鳥・古市古墳群の築造時期と階層構成再論」『古墳と古代国家形成期の諸問題』山川出版社 pp28-33
- 塚田良道 1997「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告 第4集』行田市郷土博物館 pp1-22
- 塚田良道 1999「測量図の比較から古墳の系譜を考える」『第4回東北・関東前方後円墳研究会大会〈シンポジウム〉前方後円墳の築造企画発表要旨資料』pp83-94
- 都出比呂志 1992「古墳の墳丘」『古墳時代の研究 第7巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』雄山閣 pp15-38
- 新納泉 2011「前方後円墳の設計原理試論」『考古学研究 第58巻第1号』考古学研究会 pp16-35
- 西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学 第10号』岡山史学会 pp156-207
- 沼澤豊 2011『日本古墳の構造研究』早稲田大学リポトリジ ①「古墳の設計法と造営尺」pp14-33、②「築造企画論の現在一序に代えて」pp1-13 (<https://waseda.repo.nii.ac.jp/>)
- 濱田耕作 1936「前方後円墳の諸問題」『考古學雑誌 第26巻第9号』考古學會 pp1-13
- 増田逸朗 1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社 pp401-421
- 森本六爾 1929「附録一 各地前方後円墳実測結果表」『川柳村將軍塚の研究』岡書院

《挿図出典》

- 第1図 国土地理院地図（1/25,000）に埼玉県表層地質図・熊谷（<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0108/908-20091221-280.html> 収載）を重ねて作成
- 第2図 引用文献の増田 1987の第1図（p406）に加筆
- 第3図 引用文献の岡本 1997の図49等（pp83-85）を転載
- 第4図 筆者作成
- 第5図 埼玉県教育委員会 2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』第8図に加筆、および宮内庁書陵部 2018『書陵部紀要 第69号 陵墓篇』第41図（p132）に加筆
- 第6～13図 埼玉県教育委員会 2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』第8、29、32、42、44、51、54、58、76図

墳丘外形規格からみた埼玉古墳群における前方後円墳の築造動態

に加筆

第14図 引用文献の杉崎 2006の第5図に加筆（原図は熊谷地方法務局蔵）

第15図 筆者作成

第16図 筆者作成（実測図は埼玉県教育委員会の各古墳の報告書収載図を使用、写真は筆者撮影）

第17図 百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議所有の測量図に加筆

第18図 学生社 2014『陵墓地形図集成』（宮内庁書陵部陵墓課編集）の測量図に加筆